

# 都市の民俗誌研究のあり方をめぐって

——民俗研究映像『金沢七連区民俗誌』の製作プロセスから——

小 林 忠 雄

- 
- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| 1 都市の民俗誌研究の前提     | 4 映画『金沢七連区民俗誌』のシナリオ |
| 2 都市の民俗誌研究のあり方    | 5 映像民俗学に関する若干の考察    |
| 3 映画『金沢七連区民俗誌』の製作 |                     |
- 

## 論文要旨

本稿は1991年（平成3年）度に、本館の民俗研究部が実施した民俗研究映像『金沢七連区民俗誌』の製作過程を通して考察した、都市民俗誌研究のあり方をめぐる論考である。

まず最初に都市の民俗誌研究とは何かについて、筆者がこれまで思考してきた都市の捉え方、研究視角に関する前提となる私見を述べたが、ここでは都市とは近代化の変容を余儀無くされたマチであり、柳田國男が捉えた「都市は輸入文化の窓口」というように西洋文化の移入によるファッション性が高く、より合理性を追求して生活技術文化を構築したマチと定義した。

従って、都市の民俗誌を描く際に何が主要なテーマとなるのかを列記し、具体的な調査の方法のあり方に関する私見、調査地における注意点や調査項目に関する私見を述べた。

すなわち、主として都市は感性による影響が強く、またより斬新で利潤につながる情報を求める性格のあるところから、農村の民俗社会の捉え方と異なる点を指摘した。

以上の都市の民俗誌研究のあり方を踏まえて、より有効な表現の一つである映像による方法について、金沢という都市の現状を捉えた映像記録のプロセスを順に追いながら、どのような問題があるのかを示した。

そして、最終的にまとめた成果として完成シナリオを提示し、最後に映像民俗学と都市民俗誌研究における有効性を整理し、かつ問題点を指摘しながら若干の考察を行なった。

いずれにしろ、論文および映像のいずれの表現方法にも問題があり、それぞれの利点を生かしつつ都市の民俗誌を描くしかないことを強調したのである。

## 1 都市の民俗誌研究の前提

都市を民俗学の対象として改めて問い直そうとしてから、はやくも10数年間を経ている。その間、様々な都市民俗論あるいは特定の都市を対象とした民俗事象および地域社会のデータをまとめた著書や報告書などが発行された。

これらの一つひとつの学史的論評は、ここでは目的外なので別の機会に譲るとして、総じて言えることは、民俗学としての都市は農村といったい何がどのように異なるのかという課題に対して、いまだ明確に答えられていないことである。

筆者自身もこの数年間、都市の民俗学を標榜しつつ悪戦苦闘の毎日であり、現代の日本社会の状況を踏まえつつ、新たな民俗学の研究方法のあり方を模索するため、これまでの民俗学の研究方法論を大きく離脱することなく、何らかの道がないかを探しつづけてきたつもりである。

しかし、実際に都市を対象化したとき、そこに見出した都市的と思われる民俗事象は、きわめて断片的なものであって、都市総体としての民俗社会原理を導き出すには至っていない。

このことの反省から筆者の場合、これまでの民俗学が対象としてきた農村社会の捉え方、すなわち共同体としてのムラ社会（民俗社会）の構造やそれによる生活慣習、習俗にあまりにもとらわれ過ぎてきたからではなかったかという思いがある。

つまり、都市社会そのものを民俗学が対象にするということは、都市を農村の民俗社会のように固定的なものとして見るのではなく、アメーバーのような柔構造の社会として捉え、むしろそこには様々な民俗を内包した都市生活者個人の総体としての都市社会があり、さらに新しい近代の情報や知識に刺激され、多様な心的葛藤を余儀無くさせられた都市人の姿があって、そこで展開される民俗は新たな生活適応をめぐる、伝統的なものから変容したあるいは新たに生成した民俗事象を生み出してきたものと考えられる。

ちなみに筆者の場合、民俗学はあくまで歴史学の一環であり、基本的には近現代における生活史（生活技術史）あるいは民衆思想史であると考えている。

従って、現在の都市社会に展開されている様々な事象のなかから、特に都市という社会的環境にとって有利というか適応せざるを得ない条件から発生した民俗的（？）とおぼしき生活慣行を捉え、その発生要因および機能のあり方を調査分析し、都市の近代化という短期的な時代環境の変化と併せて考察すべきであるように思う。

それはある意味では、近世期における都市の成立時期に、既に萌芽的なものがあるかもしれないし、あるいは近代のある短期間のみ機能し消滅した生活慣行も含まれるであろう。

以上の問題の所在から都市の民俗誌を描いた場合、どのような視点が前提となるであろうか。次に、筆者なりの基本的な視点を列記してみよう。

まず、民俗学が対象とされる都市の概念とは何であろうか。

これまで日本の都市のなかで古代中世都市といえば奈良・京都・大坂・鎌倉といった行政の中心である「都」を指し示し、また幕藩体制以降は諸国大名の拠点となった城下町、さらに近世において発達した市場町、宿場町、港町、大きな寺社の門前町（寺内町）や鉱山町があげられてきた。しかし、イメージとしてのトシ（都市）となると、必ずしもマチ（町）とどのように区別すればよいのか判然としない地域も多い。

民俗学においては、未だこの民俗学が言うところのトシ（都市）とは何かという議論は充分に行なわれていないので、都市の概念は個々の研究者の勝手な判断に委ねられていると言ってもよいであろう。

ちなみに、筆者の場合は敢えて農村の民俗社会と区別するために次のように都市を捉えている。

すなわち都市は近代化の変容を余儀無くされたマチ（城下町や市場町、港町等）であって、この場合の「近代化」とは、柳田國男が言うところの「都市は輸入文化の窓口」といった表現で象徴されるように、輸入文化すなわち西洋文化をいち早く取り込み、それは一面では西洋風俗といったファッション性の高いものであり、他方ではより合理性を追求した生活技術の文化を構築し、それを反映したマチであると言える。

さらに、敢えて西洋文化にこだわらずとも時代の先端をいく情報に敏感であり、気風として新しい情報を積極的に求めようとするマチ、従って様々な他国の人や物が出入りし、新鮮な情報が集積されるマチは都市の要素を内包していると思えることができる。

また、色彩や音、味覚など感性が鋭敏で豊かであって、芸術文化や風俗等の価値観を日常的に反映しているマチも都市を形成する基本的要素となろう。

それから、物流や人的交流が激しくて、時代を先取りしていく傾向は都市の条件ともなり、また、個々の家の栄枯盛衰による移動が著しく、地縁や血縁が希薄なマチ、従って多様な職業があって絆としての同業者組合がきわだって発達しているマチも都市となるであろう。

以上のような民俗学が対象とする都市の条件を踏まえて、都市の民俗誌を描く際に何が主要なテーマとなるであろうか。

- (1) まず都市の民俗といえば農村の民俗社会にないものを見つけないといけない。それは都市生活者の生き方の知恵として認められるものであり、それを起点として都市の民俗社会のモデルを想定することが可能となろう。
- (2) 都市では伝承形態のプロセスが家すなわち家族とか親族、あるいは地縁のみを基盤としていないので、伝承は都市生活者個人を基点にすべきであろう。伝承母体の重層構造。個から個への伝承性。
- (3) 都市生活者の民俗知識としては、生活情報の多様化があげられ、またその情報によってその地域が強く影響を受け、新たな民俗の発生を促す場合がある。従って、情報のルート、時期、性格などが問題となるであろう。特にマチの変化の中核をなす部分に注意する必要があるであろう。
- (4) 生活情報のなかでも中央から地方へ伝播し、特に感性的な刺激が多大な場合がある。例えば

色彩感覚、造形感覚、音（音楽）などの聴覚的感覚、触覚的感覚、空間（場所）感覚、時間感覚、味覚的感覚、臭覚的感覚などを基本とした文化の流れによる変容は注目される。

- (5) 文化的な装置としてモニュメントの設置、種々の商業広告手段、錯覚や色彩・音響を駆使した遊興装置、公園や遊園地・遊歩道の設置、諸芸術・文芸の諸団体の成立、遊興を目的とした交通手段、博物館・図書館・文化ホールなどの文化施設の設置などは、もはや都市にとって欠かせない日常的な公共施設であり、それをめぐっての社会的規範や活動は都市民俗の対象となり得る。
- (6) 都市生活者個人の家屋内で展開される生活合理化への工夫。家具や道具の種類と位置。家族の居場所とその住まい方。人生儀礼および宗教儀礼の簡素化。親子・夫婦・兄弟姉妹間の会話。新しい贈答儀礼慣行。家計簿の内訳。財産相続の方法など。

以上、特に目につくテーマについて列挙してみたが、これらを一貫して言える研究課題としては、都市の民俗とは「都鄙連続体としての民俗か、都市生成の民俗か」という、これまで都市民俗論が当初から問題にしてきた命題であることには変わらない。

## 2 都市の民俗誌研究のあり方

以上の研究の諸前提を考慮しながら、次に具体的な調査を含め、どのような方法によって都市の民俗誌を纏めていくべきかについて筆者の私見を述べておきたい。

- (1) 都市の民俗誌は歴史学の方法として、都市自体の制度の変遷過程を少なくとも江戸時代からの記録を纏めておくべきであろう。特にマチが都市化（近代化）していく要因・条件を注意深く分析しておく必要がある。
- (2) 都市の調査では農村の民俗事象と異質な事象を見つけだし、なぜそのような慣習があるのかの理由を探し出すべきであろう。また同時に同質のものがあれば何故同じなのかを探り、またその両者を比較検討すべきであろう。
- (3) 農村の民俗文化のなかには都あるいは江戸、大坂などの文化を移入し、それを模倣したりあるいはアレンジした独自の展開を見せたものも多い。特に祭礼の風流や芸能、若者組条目などには都市で発生した装飾や意匠、制度などが含まれており、これらは注意を要する。
- (4) 都市における民俗の伝承は前述したように、個人に帰するところから、調査にとってより有効な方法として、マチのなかで特に注目される人物のライフヒストリーの記録が最適であるように思われる。それはある地域のなかでその地域文化の変革のきっかけをつくった人物が必ず存在するからである。すなわち都市社会では優れた生活の知恵あるいは合理的な考え方が優先するからである。
- (5) 都市生活者のファッション感覚は、田舎がそれを否定するのに比して都市社会はその価値観を肯定しており、大きな違いを見せている。ファッションは必ずしも服飾の意匠のみを指すも

のではなく、今や生活スタイルや都市計画（ストリートデザイン）、音楽イベントなどの行事にまで及び、新しい民俗感覚まで養成しているように見える。従って都市人がどのようなファッション感覚を受容し、伝統的な生活様式に組み込んでいるのかを確認することは、都市民俗の課題であると考えられる。

- (6) 伝承母体として見逃せないのが文化集団であり、これはいわゆる伝統的な諸芸である謡曲や日本舞踊、長唄や小唄、茶道、華道から文芸としての俳句、短歌にいたるまでの様々な文化団体、さらにママさんバレーや主婦の合唱団、手芸グループといった都市的な趣味集団の動向は、その団員の家の冠婚葬祭にまで影響を及ぼし、新たに民俗社会的な諸相の展開を見せつつある。従って、このような文化集団の活動の観察や会の変遷なども一つの課題となろう。
- (7) ライフヒストリーの手法の有効性と同時に、今和次郎がかつて提唱した「考現学」の手法についても、再考する必要がある。かつて団地の民俗のデータを集積した倉石忠彦氏の仕事にも、この考現学手法が一部使われており、主婦と子供を主体とした団地社会の構造が明確に示されたことは記憶に新しい。
- (8) 都市の民俗学は今のところ、これといった明確な方法論がある訳ではない。従って今は研究者のそれぞれが独自の方法を駆使し、様々なデータを集積して多様な見解を出すことが先決であるように思われる。

その一つの方法として視覚、聴覚的な事象の記録、及び空間の把握として映像などによって表現可能な手段を取ることも必要ではなかろうか。

- (9) その場合に、これまでマチとか都市というと、職種として商人とか職人が中心とされてきたが、職種の色分けはこの際あまり有効ではない。何故ならば、商人や職人といってもそれが都市的な民俗の内容に触れたときには、職種とは無関係に展開する場合が多いように感じられるからである。
- (10) 都市の民俗文化として、いわゆる「言葉の文化」あるいは「造形の文化」として捉える視角が必要に思える。これは都市がウィットに富み、その才覚を尊ぶ風潮のあることから、都市ならではの民俗事象の特徴として言葉の世界が浮かび上がってくるからである。また、都市人のもう一つの才覚として、造形感覚に顕著なものを見ることができる。それは日本人のハレ感覚を表現するバリエーションの豊富さと、みごとにまでセンス溢れる造形的手腕は、他の民族の追従を許さぬ巧みな技術なのであろう。

筆者の場合は以上のような射程を設けて都市のフィールドに臨み、さらに以下のような細部の調査に係わる注意点や項目を設定している。

- (1) 都市の調査では都市自体が10年単位で変容するので、伝承者の年齢差によって時代背景や社会風潮および世相が異なっており、同時にその受け取り方の感覚が異なる場合がある。従って伝承者の世代に注意を要する。

都市の民俗事象は短期間のみ機能している場合がある。従って、これを風俗現象として捉え

るのか、民俗事象として捉えるのかの判断は難しく、注意を要する。

- (2) 伝承者の家の系譜、盛衰、生い立ち、環境、移動などを押さえておき、伝承者個人の知識や判断がどこでどのように形成されたのかを注意すべきである。特に事業の失敗や成功談などは、充分知っておく必要がある。

また、伝承者が他地方での転勤の経験があるのかどうか、長期の海外旅行の経験があるなどの要素についても注意をはらっておく必要があろう。

- (3) 都市は人工的なものであることから、都市の成立過程には様々な為政者あるいは支配者側の論理や民衆がもつ下意識の論理が働いており、基本的なトポロジーを確認しておく必要がある。特にマチ並みの変遷にともなって、各時代に生きた人々にとってのランドマークとなった構築物には注意を要する。

また、様々なランドマークを周辺の人々がどのように受け止めていたか、受容・反駁・戸惑いといった心理についても探る必要があろう。

そして、同時にマチ並みの改造計画（都市プラン）や各家の屋内プランの変化にも注意すべきであろう。

- (4) 都市には都市社会故に通用する様々な俗信があげられる。特に商売繁盛に係わる俗信、病気や災厄に係わる俗信、試験などの合否をめぐる俗信、男女や親子・職場の上司や同僚などの人間関係に係わる俗信といった多様な人々の思いが反映しており、従って、俗信の調査には常に重点をおく必要があろう。

また、都市は一方で生活における合理性へのあくなき追求があるのと同時に、他方ではそれに耐えかねてか、あるいは破綻をきたした人間の、およそ不可思議な非合理的な言動や事象を展開することがあるので、そのような逆の事象にも注意を要する。

さらに都市生活者と新興宗教との関わりについても調査する必要がある。

- (5) 都市では都市全体を揺り動かす大事件が発生する場合が多い。特に時代の変革期と目される折り目の事件に、人々がどのように関わったのか。また流言飛語（デマゴーク）をどのように解したのか、どう対応したのかについては興味深い問題がある。

- (6) 都市では人間関係、すなわち付き合いの度合いが重視され、きっかけや利害関係、付き合いの日常的なあり方、贈答慣行などが問題となろう。

特に同業者集団あるいは文化集団への加入儀礼や、その集団が主催する年中行事などに特徴を見出すことができるので、注目する必要がある。

- (7) 都市の地域社会を論じるとき、社会集団として町内会が多くとりあげられてきたが、町内会の機能をよくよく分析してみると、これまで民俗学が論じてきた村落の社会組織とどこがどのように違うのかといった課題に対して、明確に答えてはいない。町内会の制度的な変遷については、次第にその規制が緩やかになってきており、そこにも都市生活者が本来もっている合理性によるところの簡素化の現象のみが目立つからである。

筆者の私見によれば、地域のいわゆる地縁集団が効力を発揮するのは、大きなマンションが建つとか、道路の拡張工事があって立ち退きを要求されるとかの住環境の利害に関わる問題が生じたとき、あるいは地域起こしのためのイベント行事が企画されたとき、そして葬式が行なわれたときなのである。

従って、これまでの町内会研究でありがちな社会学的手法の調査よりも、マチにおけるトピックスの詳細な調査研究に重点をおくべきではなかろうか。

- (8) 都市生活の享受といった視点からは、遊興に対する人々の意識、言動があり、また前述したように感性の刺激といった事象に言及し、人々が何をどのように学習しているのか、新鮮な刺激の情報の集め方、そしてそれらを享受できる場や装置などを調査対象とする必要がある。しかも、そこには短期間のみしか機能しないまったく風俗的なものも数多く存在していることから、民俗学の範疇としては、むしろ青少年あるいは壮年・老年といった年齢集団ごとの通過儀礼的な視点からの解析が必要であるように思える。例えば、食べ物の嗜好性の変化や味覚の変化などの要因についても対象とすべきであろう。

これまで述べてきた私見については、まったく筆者自身が都市の民俗を考える際に、最も顕著な事例でもって、少なくとも都市を描くことが可能であろうと思われる視点や調査項目を箇条書きに示したものである。

そして、このことを基点にして都市の民俗誌を纏めようとした場合、比較的うまく表現できる手段として映像による方法があった。

映像は現状を一目瞭然に示すものであり、構成によっては隠れた本質部分を明確に表に出すことも可能である。

さらに、都市の人工的機能や色彩、音、人間の言動といった感性的なものに触れる場合に、映像は表現し易いメディアである。

筆者の場合、たまたま民俗研究部が毎年実施している『民俗研究映像』事業による民俗誌製作の機会に恵まれたため、上記の視点による都市の民俗誌研究に取り組むこととなった。

以下はその製作過程を示すことによって、この研究方法のあり方を具体的な内容に沿って述べてみよう。

### 3 映画『金沢七連区民俗誌』の製作

#### (1) 企画立案及びロケーションにいたるまでの過程

1991年（平成3年度）の民俗研究映像は、北陸の旧城下町である金沢を対象に行なった。

金沢は周知のとおり江戸時代には加賀藩120万石の中心都市であり、江戸末期の人口はすでに約15万人を数え、江戸、大阪、名古屋に次ぐ大都市であった。

明治初年に金沢の町を統治しやすいように、新政府は市街地を七つに区切った連区制度を設け、

その内の一つで市街地を流れる浅野川の川向こうの地域を「七連区」と称していた。

この七連区地域は、金沢の中でも古くから職人や商人などが多く住み、従ってどちらかと言えば下町っぽい性格を有し、きさくで人情味溢れる庶民のマチを形成していた。

民俗の研究映像は近年問題視されている都市民俗学的視点から、このマチの現状を捉え、何が都市的な民俗事象なのか、伝統的なものがどのように残され、どのように変化したのか、従って都市の人々とは一体何なのかといった都市の本質的な部分に迫ろうとするものであった。

この研究映像の制作を担当したのは筆者と菅豊の二人で、特に金沢を長年研究のフィールドにしている筆者が企画立案を行なった。

以下、実際の制作開始にいたるまでの過程について簡単にその経過を説明しておこう。

① 1990年2月、翌年度の概算要求に民俗研究映像の次回制作を、金沢を対象とした都市の民俗誌を予定とすることを盛り込むことが民俗研究部会で了承された。また当初の計画では金沢の市中を流れる浅野川の周辺に住むある特定の職人さんを選び、その伝統技術や歴史的背景或いは日常生活を通して一つの地域を描くことを目的とした。

② 同年6月、担当者である筆者は金沢に行き、浅野川周辺の状況を調査しながら、金沢の都市の民俗的な事象とその特徴を最も適格に表わすことの出来る人物がいなかったかを検討した。

また、これまで筆者が調査した内容をどのように映像化できるのか、さらに新たな素材がないのかといった検討も行なった。

その結果、いくつかの課題が見つけた。まず一つは、金沢の地名発祥に由来する砂金にまつわる事例で、同じく市中を流れる犀川の上流にて桐の下駄を履き、裏側の木質部に減り込んだ砂金を採取して生計を立てている人物がいること。

浅野川にかかる常磐橋から少し遡った卯辰山麓に面した小さな滝で、金沢の市中に住む修験道者の人々が時折水ごりを行なっていること。

浅野川川下で藩政時代から皮革職人の頭領として代々家を継いできた人物がいること。

その他、漆器職人の徒弟の契約儀礼等の新たな素材が考えられたが、それらの実態の確認とさらなる情報収集について地元の関係者に依頼した。

③ 1991年2月、前もって依頼していた映像素材に関する情報が未確認のまま、筆者は仮題『都市に生きる人々—金沢七連区民俗誌一』の1回目の構成案を部会に諮った。

④ 同年4月になって金沢からいくつかの情報が寄せられ、その結果、砂金採りの人は不明であること、修験者の水ごりは今はほとんど見ることがないこと、皮革職人の頭領は近年死亡していたこと、金沢漆器などの徒弟契約儀礼は今は行っていないことなどが判明した。

⑤ 同年5月初旬、正式な企画書を作成し部会の了解を得た。その内容は次の通りである。



平成3年度「民俗研究映像」企画書

国立歴史民俗博物館 民俗研究部

1 タイトル

『都市に生きる人々—金沢七連区民俗誌—』（仮称）

2 成果品

16ミリ映画フィルム（カラー）約120分 1本

3 製作期間

平成3年度（～平成4年3月31日まで）

4 製作主旨

国立歴史民俗博物館における研究は、歴史・考古・民俗三者の協業による広義の歴史学研究センターとしての役割を担うべく、従来にない学際的な研究方法と分野の確立を目指しているが、その手法として映像資料の製作を通じた日本文化研究の試みに着手しようとするものである。上記の観点から、映像資料の製作に当たっては従来のような単なる儀礼・芸能・技術等単体の記録ではなく、それらの背景となる地域の生活様式をも多角的に、構造的に把握しようとするものである。こうした映像を通しての調査研究によって、既成の調査研究とは異なった視点で、動的把握から人間の心情の把握まで総体的に資料化することが出来るものと考えられ、同時に既成の民俗学研究に加えて「映像民俗学」という新しい研究分野の構築も可能となると考えられる。このため、各地に点在する民俗的事象について、記録的要素も加味した研究映像製作を系統的に行なっていくため、この製作を行なう。

5 企画目的

本館ではこれまで論文形式でしか表わせなかった民俗誌の研究記録に関し、映像によってどのような表現が可能になるかを、実験的に行なってきた。従って、この企画についても従来から踏襲されている映画手法を無視したあくまで民俗学の学術研究を意図した研究映像の製作であることを目的とする。

この企画は現代の都市社会に住む無名の人々の家や社会における日常生活の実態、及びそのような人々の社会への帰属意識やその葛藤、人生観や心意的世界などを歴史的社会的民俗的な具体的事例を踏まえながら映像化しようとするものである。従ってここでは特に近世城下町において急激に人口が肥大化してつくられた地方都市金沢の古い生活慣習と現代人の合理的思考との相剋について、藩政期から職人が数多く住むという庶民のマチとして知られた浅野川を挟んだ河向こうの七連区に住む様々な職業の人々を対象に、その生活ぶりを映像化することによって、上記の問題に迫ることを目的とする。なお、本企画構成については本館民俗研究部の小林忠雄・菅豊が担当し、

内容等については、小林が既に発表している金沢の民俗研究『都市民俗学一都市のフォークソサエティー』（1990/5 名著出版刊）をベースに行なう。

## 6 この映画の主たる内容

北陸の伝統都市金沢は藩政時代は加賀藩の城下町として栄え、明治以降は北陸における商業金融の中心都市として、または旧陸軍の第九師団の本拠地となった軍事都市として、さらに旧金沢第四高等学校を中心とした学園都市としてその性格を変容しつつ営んできた。

しかし、この藩政期以来の伝統を温存しながらも、近代化の波に呼応しながら都市的機能を失わずに現在にいたる姿の背景には、そのマチ域に生活する様々な職業につく無名の人々の存在を無視するわけにはいかない。

例えば旧城下町の時代から多くの需要に支えられ、その技術を継承してきた諸職業につく人々がいる。従って、ここでは彼らが伝統都市においてどのような役割を担ってきたのかを、例えば都市社会のトポロジカルな視点或いは都市社会を底辺から支えてきた構造、日常的な人間関係の仕組み（家族・同族、町内・隣人）、生業の場所や技術の伝承方法、職人一家の生活リズム、家や地域の年中行事など現時点で確認できる範囲の事象を対象に映像化することが考えられる。

ちなみに、金沢は明治初年に金沢県政府が都市行政の仕組みとして、都市域を七つに区分する連区制度が、今日でも人々がマチを語る際には生きている。従ってここでは、藩政時代から諸職のマチとして知られた七連区を一つの範囲として、そこに生きる人々を対象に映像民俗誌を製作する。

## 7 構成（案）

第1部 (1) 導入イメージ、この映画が旧城下町金沢のエッジにあたる浅野川の河向こうに位置する七連区の人々を対象にした映像記録であることを象徴。

浅野川の情景・職人の語りの一コマ

(2) 七連区で職人さんが住む家の周辺の小路で夕涼みをする人々

朝顔の鉢・縁台・団扇・子どものはしゃぎ声……

(3) 七連区の空間構造

家並み・浅野川・橋・卯辰山・宇多須神社・東山（寺院群）・茶屋・学校・繁華街・墓所・坂・辻・小路・空き地・空き家・用水・集会所等

（ここでは特に都市のなかの自然環境あるいは季節的な変化、人の移動とか生活との対応などについて配慮する。）

(4) 伝統都市金沢にて対象となる様々な職業

〔伝統産業に関わる職業〕

箔打・染物屋（紺屋）・紋屋・木地師・塗師屋・提灯屋・蒔絵師・飾り職・

仏壇屋・仏具職・水引細工職・和菓子職・郷土玩具・木彫師（欄間作り）・刺繍職・縁起物作り・漬物屋・佃煮屋・友禅糊置き師・型紙師・飴屋・袋物師

〔生活必需品に関わる職業〕

米屋・酒屋・醬油屋・八百屋・魚屋・乾物屋・豆腐屋・粉屋・麴屋・食堂・うどん屋・駄菓子屋・陶器屋・呉服屋・洗い張り・縫い物・靴屋・下駄屋・傘屋・床屋・洗濯屋・材木屋・左官・大工・建具屋・ブリキ屋・石屋・瓦屋・木羽割師・配管屋・ポンプ屋・畳屋・植木屋・表具屋・襖張り・簾屋・紙屋・神道具屋・油屋・炭屋（燃料店）・金物屋・包丁研ぎ師・反古紙屋・風呂屋・質屋・桶屋・竹籠・鍛冶屋・運送屋・煙草屋・時計修理師・花屋

〔都市のなかの雑多な職業〕

料理屋・宿屋・お茶屋・芸者置屋・髪結・鬘髻屋・仕出し屋・屋台商（おでん・やきとり等）・占い師・山伏・芸能師匠・釣り具屋（釣り竿師・毛針作り）・川漁師・漁網店・製本屋・印刷屋・はんこ屋・古本屋・貸本屋・古物商・漢方薬・針灸師・あんま・写真屋・機屋・旗屋・砂金取り・金魚屋・紙芝居・鳶職・興行師・銃火薬店・看板屋・箱屋（折詰箱）・曲物師・染料屋・その他（以上の諸職業から30年以上を経て、伝承性の濃厚な職種のかを選択する。）

但し以下のような点に留意し、撮影を行なう。

- 1 都市社会の構造を明らかにするため、様々な職業の人々が雑多に集合するマチといったイメージと職人の日常性を強調する。
- 2 職人の技術そのものを撮影するのではなく、技術伝承の方法について、あるいは職人が日常的に触れている感覚の世界についての映像化をはかる。すなわち、職業を通じた色（職業表徴としての色）、常時聞いている音などに留意する。
- 3 各職人の生活のなかでエピソード的に捉えられる庶民の人生儀礼、例えば産育儀礼（初宮・百日祝・初誕生・初節句等）・徒弟契約（漆職人）・嫁取り・厄年祝い・還暦祝い・葬式・組合加入・習い事・七橋渡りなどの儀礼を折り込む。

また社寺の年中行事である四万六千日（唐黍市）・ご涅槃・蓮如さん・墓参り・獅子舞等もうまく七連区の人々と結びついたならば、それらの行事も折り込む。

- (5) エンディングイメージ、現代都市の諸相  
年末の市場の雑踏、社寺の参詣など。

## 8 撮影・製作スケジュール

6月上旬 金沢の地元関係者への協力要請および事前調査。

7月中旬 現地撮影打ち合わせ会、七連区の空間構造に関する撮影。

夏季間に特徴のある職業および職人の撮影。

8月下旬～9月中旬 年中行事の撮影（卯辰山観音院の唐黍市・秋祭りなど）。

9月下旬～10月下旬 職人の伝承と証言の記録。

11月下旬 冬季間に特徴のある職業および職人の撮影。

12月上旬 生業祭り（コクソ祭りその他）・人生儀礼（厄年祝い等）の撮影。

12月下旬 上記撮影の補充および七連区の空間構造に関する撮影。

1月上旬 正月行事の撮影。

2月～3月 編集作業、音入れ。

3月20日 完成。

- 
- ⑥ 同年5月末、筆者と菅の両名は正式に地元関係者に映画制作への協力方を依頼するために金沢に赴く。

その折、特に伝承者の割り出しや紹介などについては、浅野川大橋近くで明治初年からお茶商を営む米沢茶店の主人米沢修一氏によって全面的な協力をいただいた。

その他、主要な伝承者との撮影スケジュールのアポイントメントや日程調整等を精力的に行ない、どうにか撮影実施の段取りを組むことができた。

- ⑦ 同年7月上旬に本館の会計課及び民俗研究部が作成した映画制作の仕様書・シノプシス・制作要項等を提示して説明会を行ない、さらに同月11日には映像制作関連会社5社による競争入札を行なった結果、㈱大阪東通が落札し、ただちに撮影準備のための打ち合わせを行なった。

### （2）ロケーションの状況とその過程

ロケーションは全体の計画では8回で28日間の撮影日数を予定したが、最終的には日数は変わらなかったけれど撮影回数は年中行事や人生儀礼等の日程の関係上、約12回の小刻みなロケーションとなった。

第1回のロケーションは1991年7月22日～27日までの6日間行なった。

まず企画書の構成に沿って伝統産業に関わる職業を中心に畳屋、米屋、醬油屋、魚屋といった日常生活に欠かせない職業などを主に選択し撮影を開始した。

撮影の内容は、一つには伝承者の家の系譜ならびに盛衰、その職業を始めた動機について、その伝承者の生い立ちや師弟関係についてなどを語ってもらうこと、もう一つは技術の伝承について、いつ誰からどのような方法で学んだか、特にそれぞれの職域において最も難かしく修得するまでに年月のかかる技術とは何か、そして技術のこつというか要の部分等を語ってもらい、また

その技術がどのように改良され変化したのかといった点にも焦点をあてて聞いた。

またこの映画は伝統工芸や職人の技術工程を表現するものではないので、全部の工程を追うことはしないが、その職種の最も特徴を表わす工程の一部は努めて収録することにした。

そして語った内容に即して実際の作業光景についての撮影を行なった。ここでは特に職場環境に留意し、場の空間の表現に神経を注いだ。

さらに、結果としてどのようにまとめるのかはさておき、とりあえず各職業にはその職業がもつ象徴的な色彩、或いはその職人が仕事を通じて日常的に見慣れている色彩や作業を通じて聞き慣れている音に注目し記録として収録した。

商店の場合は職人と異なり特に顧客関係や客の嗜好の傾向、売り方のアイデアなどに特徴が見出されると考えられ、そのあたりを重点的に聞くようにした。

初日は生憎の雨天であったため1番目の撮影対象となった畳屋さんでは、屋内の店先がかなり暗く、従ってライティングでもって伝承者の顔や仕草に光を当てて撮ったため、画像は鮮明ではあるがどこか不自然な感じが否めず、スタッフ全員で協議した結果、今後は基本的にはノーライトで進めることを確認した。ただし屋内撮影でどうしても光の量が足りないときは、できるだけ間接照明で補うこととした。

ちなみに聞き取りの手順は次の通りである。

- 1 伝承者の名前、生年月日、生い立ちと家の系譜・変遷について、現在の家族構成、師弟及び従業員との関係などを、まずは基本的な質問事項とする。
- 2 職人の場合は仕事の手順について、特に神経を注ぐ難しい技術について、それを学ぶための方法、商人の場合は商品の入手方法、商売の基本姿勢、大売り出し等の特殊な売り方について、顧客関係及び客層の変化、商売上のアイデア、昔の売り方と今日の売り方の違いについて、失敗したこと儲けたこと等のエピソード。
- 3 その職業を通じた材料・商品の色彩、或いは象徴的な色彩があるのか。また関係する音とは何か。作業場の空間について特殊な装置や独自の工夫が施されているかどうか。
- 4 その職業を通じた年中行事・祭礼・通過儀礼について。
- 5 伝承者の子供の頃の周囲環境について。どのような遊びをしたのか。他にどのような店があったのか。マチ中の通りの変遷・変容について。
- 6 後継者及び将来の見通しについて。

以上の質問の中で、我々としては浅野川を挟んだ川向かいと手前といった場所意識すなわち都市空間としてのトポロジーへの関心があり、その職業における顧客及び客層との位置関係に注意した。

また、作業場及び店先の撮影は出来るだけ自然な映像を撮るように努め、従ってカメラをなるべく目立たない位置に置き、長時間回し続ける手法をとった。

同じく伝承者のインタビューの際には、話者の緊張の度合いによって、なるべく緊張がほぐれ

るまで肝心な質問を避け、どうしてもよい世間話から始め、多少気分が和らぐのを待ってから本質問にいくようにした。従って一人の伝承者に費やされたフィルムは平均して約30分を要した。

さらに、色や音に注目したためそれを端的に示す材料や手元のアップを多く撮影した。

第2～4回目のロケーションは8月中旬から下旬にかけて行なわれ、まず日蓮宗真成寺の虫干しと、幕末に卯辰山泣き一揆で処刑された首謀者七人の冥福を祈って建てられた寿教寺の七稲地藏にちなむ地藏盆祭りの様子と、同じく卯辰山観音院の往時は唐黍市で賑わったという四万六千日の仏教行事等を主に収録した。

第5回目のロケーションは9月22日の秋分の日深夜12時を期して行なわれている七つ橋渡りの儀礼を中心に実施した。

この行事は話に聞いているものの、具体的にどのような状況で展開するのかはまったく不明であり、また繰り返しのきかない宗教行事であることに一抹の不安をいだいて撮影に臨んだ。そして、事実、約20人ほどの40～50代の婦人達が一団となって午前0時の時報を合図に、まったく無言でひたすら足早に行く人々を撮影するのは並大抵なことではなく、我々は肩に食い込むほどの重い機材を担ぎ、息咳きって追いかけるのに懸命であった。

僅か15分程のこの儀礼は、それでも金沢の都市の民俗を示すものだけに貴重な撮影フィルムとなり、我々は十分な満足感を得ることができたのである。

この一団の中にはたまたまカナダから来ていた留学生の女性が、どこかで七つ橋渡りの話を聞いてそれを体験するために加わっていたが、我々は何も言わずにそのまま撮影した。

さらにこのロケーション期間中に第1回目の撮影の際ライティングに失敗した福岡畳店の採録をすることにしたが、実は前回の撮影後に福岡さんから私宛に手紙が届き、前回に言い足りなかったことがあるので、もう一度収録しなおして欲しいかとの要望があったからでもあった。

第6回のロケーションは11月6日～11日までの間集中的に行ない、この時は以前から撮影の依頼交渉していた東茶屋街にある中村屋の芸妓ふみさんを中心とした遊興や芸能の世界の撮影、ならびに何年に一回しかやらないという中島町町会による祭礼そおろり行事の座談会の収録とそして加賀友禅・加賀蒔絵等の伝統工芸の撮影を行なった。

このロケーション終了後、カメラマンを含めた技術スタッフ全員から、一体どのような映画を作ろうとしているのかよく分からないので今少し説明してほしいといった要求が出され、またこれからどのように対処すればよいのかといった疑問が出された。

このことは企画の構成段階で、構成自体がまだ十分に固まっていなかったことを露呈したのであって、特に主題即ちモチーフが明確でなかったからでもあった。

しかし、この時点で我々が取り組んだ目的はあくまで都市の民俗誌を描くことであって、この都市の民俗誌そのものが一体どのようなかたちのものなのかは、今だかつて誰もやったことのない未知の分野なのである。また、当初からベースとしていた私の著作である『都市民俗学—都市のフォークソサエティー』における具体的な事例研究の内容では、この金沢においてある特定し

た地域社会の民俗誌を表現するには、事前の情報があまりにも不足していたのである。

従ってスタッフといろいろ討議しているうちに次第にはっきりしてきたのは、現在の七連区地域がかかえている社会問題であり、また民俗の変容というか民俗にとって今日までに変わったものが何であったのかを見つけ出すことであった。

このことについては次のロケーションまでにその素材を探すこととした。

第7回のロケーションは、11月16日に偶然にも七連区内に住む家同志の結婚式があるとの情報を得、また撮影に積極的に協力してくれるとのことで、新嫁が実家を出てから後婚家先の玄関で行なう合わせ水の儀礼、ならびに婚家の仏壇に参り嫁暖簾をくぐるまでの一連の婚姻儀礼を撮ることができた。

第8回のロケーションは12月21日に行かない、この時は定点観測撮影と称して浅野川大橋とその下流の中の橋のたもとにカメラを据え、午前7時～8時、午後1時～2時、午後5時～6時の3回にわたって、同じ場所で同じカメラアングル、同じサイズの画像にて道行く人々を撮影した。即ちこれは七連区に住む人が橋を渡らなければ市の中心部へ行けない条件を利用し、主として通勤、通学の生態を観察しようとしたものであった。しかし、時期が冬期間であったためあまり顕著な結果は得られず、目論見はみごとにはずれた。

ただ一つだけ注目された現象として、歩行者専用のその橋のたもとには左右二つに分かれた小さな階段があり、その階段の前には車がほとんど行き来しない広場があって、橋を渡ろうとする或いは渡ってきた歩行者はその広場を必ず通らねばならないが、それを観察すると、かなりの数の人が不思議とその広場を対角線状の斜めに横切る習性があった。

この現象が何を意味しているのかについてはにわかには答えは出せないが、広場に対する何らかの無意識な心理が働いていると考えられる。

#### 4 映画『金沢七連区民俗誌』のシナリオ

平成4年1月過ぎから筆者と菅豊は構成（シナリオ）の作成に入った。これは1月末日に予定している最終ロケーション前にある程度構成を完成しておき、撮影のとりこぼしを防ぐためである。

企画書段階で予定した構成案は、それまで撮影したフィルムのラッシュを検討していくに従って、現実との大きなズレを生じ、再度何がメインテーマなのかがいささか不明瞭になってきたからである。

映像による民俗誌というこの映画全体のコンセプトをクリアすると、都市そのものが多面的であるため、あまりにも多くの要素が入り過ぎ整理がつかなくなったからでもある。

そこで、全体を2時間という余りにも長大な記録映画であることの制約をいくぶん緩和させ、パート1、パート2の二部構成とすることにした。その構成の主旨等については、後半のシナリ

オにて参照されたい。

ちなみに、シナリオをつくるまでの過程では紆余曲折があり、まず最初に我々が基本的に考えたのは以下の構成である。

『第1部、都市に生きる人々』では、まず最初に「庶民を支えた職業」として、日常生活と関わる職業というか商店の人々の伝承を主に構成した。すなわち、米屋、味噌醬油屋、魚屋といった人達であり、またここではこの七連区地域の地域性を表現するようにした。

第二に庶民の信仰をテーマとし、ややトポロジー的視点と心的世界を表現するため、卯辰山観音院の四万六千日の行事、芸妓と深く関わる寺院、七つ橋渡りの儀礼などを主に構成した。

第三に都市の遊戯空間を支え、またそこでのプロ意識が最も如実に表わされる芸事を主とした人々、特に芸妓を中心とした世界、その装置をつくる人々に焦点をあて、同時に最も都市らしさを表出する色彩の文化についても触れながらこれを構成した。

第四にこのような都市の様々な装置、舞台を支える職人に焦点をあて、建具や畳、竹細工、或いは染色、金箔といった華やかで芸術的と思われる技術の粋に着目した。

第五として最終的に何をいいたいのかということで、とりあえずこれについては保留することとし、只今現在、この七連区地域で何が問題となっているのかを、次回の撮影と並行しながら見つけ出すことにした。

従って、最後までこの問題にはスタッフ全員が頭を悩まし、時には激しい口論まで飛びかかっての議論が行なわれたのである。

ただ、ここで言えることは、これまでの記録映画或いはドキュメンタリー映画にありがちな、構成上のパターン化だけは避けたいというこちら側の意図はともかくとして、実際にこれまで様々な映画人が積み上げてきた結果としての映像手法との間を、この際いっきに変革することは難しく、我々はある程度妥協せざるを得なかったことだけは確かである。

とりあえず、最終のシナリオを論文末に示しておこう。

## 5 映像民俗学に関する若干の考察

筆者は1985年に北陸三県民俗の会年会記録『北陸の民俗』第3集において、その直前に国立歴史民俗博物館と石川県立郷土資料館が共同製作した「あえのこと」行事の映像記録について「奥能登の“あえのこと”ビデオフィルムを作って—映像民俗学への提言—」と題した論文を書いたことがある。

この論文を踏まえ、今回の都市民俗誌の映像製作を通じ、多少なりとも映像民俗学のあり方について若干の考察を付け加えておきたい。

まず、先の「あえのこと」の映像製作において、いくつか気付いた点を要約すると次の通りである。



第一に、博物館における記録フィルムの活用面からみて展示を補う視聴覚機器を配慮すれば、いわゆる映画フィルムよりもビデオフィルムの方が利用しやすい。しかし、フィルム保存から言えば磁気テープの耐用年数や磨減度を考えれば不適格であり、映画フィルムの方が良い。また仮にビデオフィルムをそのまま保存するならば、ビデオディスク方式の保存が望ましく、製作者がそれぞれ個々に保存するよりも、国立のフィルムライブラリーセンターにて保管すべきである。

第二に、民俗行事の撮影は、行事そのものが瞬時に終わる場合が多いので、撮影のとり直しはできず、従って機動性が要求される。このような撮影条件や様々な場面に臨機応変に対応するためには、16ミリ映画フィルムのカメラよりも、ビデオカメラの方が失敗が少なくてすむ。

第三に、ビデオフィルムおよびカメラは人間が実際に見ている光量よりも、より微細に捉えることができ、従って多少暗い場所、例えば夕暮れの光景、室内の情景などを人工照明を使わずに自然に撮れる利点があり、この種の民俗的映像には最適である。

第四に、ビデオ映像は現代人の茶の間のテレビを通じて見慣れているので、違和感が少なく、このような現代人の感覚をうまく利用して映像を通じた民俗学の啓蒙活動を推進することができる。

第五に、ビデオは撮影直後に映像を早急を確認することができ、また編集においても手軽にできる利点がある。これまで、技術的なことから、製作者がプロを使ってしかできなかった編集作業を、製作者自身の手によって荒編をこなすことができ、製作者の構成意図を直接反映することができる。

以上、五つの点からビデオ機器による映像記録のあり方を指摘した。

また、民俗学にとっての映像とは何かという点については、あえのこと行事を通じて、次の点を強調した。

まず、文字で示す論文と違って、生の映像を並べることによって一つの民俗行事の説明をしなければならないので、絵と絵の間に矛盾があってはならないこと。いわゆる一貫したストーリーがなければならないのであって、あえのこと行事の場合には儀礼を行なう人物と田の神との関係を示す状況が常に問題となり、従ってカメラの位置や角度が重要であった。

また、従来から問題とされてきた田の神と山の神、家の神の往環現象について、どのように捉えればよいのかといった点にも注意を払い、記録の上で矛盾なく理解できるよう撮影に気を配った。そして、このことから能登の農村の地形を表現することにも苦心し、これが山の行事なのか里の行事なのかの性格づけにも問題があった。

我々はこの時は一応、坪井洋文の『稲を選んだ日本人』（1982年、未来社刊）にて記されたサイ（境）空間の儀礼として位置づけたのである。

このように民俗行事の映像化には、これに関わる学説を検証するといった姿勢と、新たに映像で捉えた場合に、撮り終えたフィルムラッシュを分析する段階で、これが本当に学説どおりの実態なのかを相当吟味しておかなければならない。

そして、撮られた映像から行事を分析することによって、山の神の儀礼と田の神の儀礼のそれぞれの要素が抽出され、その習合情況が明確になったのである。

以上が、この論文の要旨であるが、筆者の場合その後さらに、能登の珠洲市片岩町白山神社の2月神事である叩き堂祭りを中心とした『猿鬼とたぶの木一折口信夫の世界一』、加賀平野や能登半島で主として6月に展開される虫送り行事を対象とした『実盛の怨霊祭りー加賀能登の虫送り行事一』、さらに加賀市菅生石部神社の2月10日に毎年行なわれている俗に「竹割り神事」と称される御願神事の全貌を捉えた『竹割り神事ノート』の計3本の映画を作成した。(この映像記録は1983~84年にかけて石川県立歴史博物館が製作した展示用のビデオ映画である。)

従って民俗の研究映像製作は今回で5本目となり、前述したあえのこと行事のビデオフィルム製作を通じた「映像民俗学」のあり方についての論文を踏まえ、都市民俗誌研究にとっての映像化について考えてみると、次のようなことが言えるであろう。

まず、このことの最も有効な利用方法として、

- (1) 映像製作を通じて民俗の実態に関する現状把握をチェックするには、きわめて有効な手段である。
- (2) 都市民俗学のデータが少ない現状から、都市では何が問題となるのかといった研究対象を決める際のきっかけをこれによってつくることができる。
- (3) 論文の文字だけによるイメージ(想起)の置き方には、個々人の経験の度合いや環境によって相当の違いがあり、実態とのズレを生じることがあるので、映像はそれを修正することができる。
- (4) 都市では感性に関する情報(色彩や音、ファッション、生活スタイル、デザインなど)やそれをともなった民俗事象の展開が多いので、論文では充分表現できない部分を映像は補ってくれる。
- (5) 同様に、都市はめまぐるしく変化するので、その変容の実態を充分検証しないままであっても、後世に研究素材を残すことができる。
- (6) 都市のトポロジック的視点の表現は図解するだけでは難しいので、映像はその実態を的確に表わすことができる。また民俗事象の場や環境、背景をリアルに表現することができる。
- (7) 伝承者がどのような語り口(方言も含む)を展開しているのか、微細な表情(悲しみ・怒り・笑いといった)を映像は捉えることができ、都市の世間話や伝承者が生きた時代の風俗をそのまま表現することができる。都市で展開される民俗芸能などの芸事に関する情報はことに表現しやすい。
- (8) 従って、都市の考現学に関するデータ収集についても映像は威力を発揮する。また、1日の変化、季節の変化など時間的な位相に関するデータも収集可能である。
- (9) 技術の過程、あるいは技術のこつ、伝承の方法など、文字で書き表わせないものについて、映像はそれを適格に伝えることができる。

次に、逆に映像による民俗誌を構成する際に、不備な点あるいは問題点もあるので、それについてはいは次のようなことが言えるであろう。

- (1) 視覚的情報が主体となるため、素材が限定されている場合は説得力に欠ける。
- (2) 資料の細かな分析を行なう必要がある場合は、映像では充分な対応ができない。
- (3) 映像表現には構成者の主観による選択が恣意的に行なわれることがあるので、一見実態として表現されているように見えて、必ずしもそうでない場合があるので注意を要する。たとえば俗に言う「やらせ」といった手段を見極めることは甚だ困難である。
- (4) 伝承者および民俗事象を行なっている人にカメラを向けることは、いわば非日常的行為となるため、必ずしも真意を伝えることにならない場合がある。従って過剰な表現や消極的な表現をとまなうことがある。すなわち、基本的に人々の自然体を捉えることは難しい。
- (5) 特に民俗的な社会問題を扱う場合には、カメラに記録されることを嫌う場合が多いことから、その実体を捉えるのはなかなか困難である。
- (6) 総体として論文の表現よりは平易になりがちで、実写であるから真実を表わしているという映像神話に惑わされる場合があるので注意を要する。

また、映像の解説においてもナレーションや解説テロップの表現には時間的な制約や画面の範囲の制約などがあるので、製作者側の意図や分析結果が充分伝わらないことがあり、限界がある。

このように、民俗映像の利点あるいは不測な点を列記すると、いずれにしる帯に短し褌に長しといった長短があるので、都市の民俗誌の表現方法には論文あるいは、映像といったそれぞれの利点を生かしつつむしろ合体した方法をとることがこの際有効なのであろう。

最後に本館の民俗研究映像を製作するにあたり、地元の関係者、および製作技術スタッフの方々には多大なご協力をいただいた。厚く御礼を申し上げる次第である。

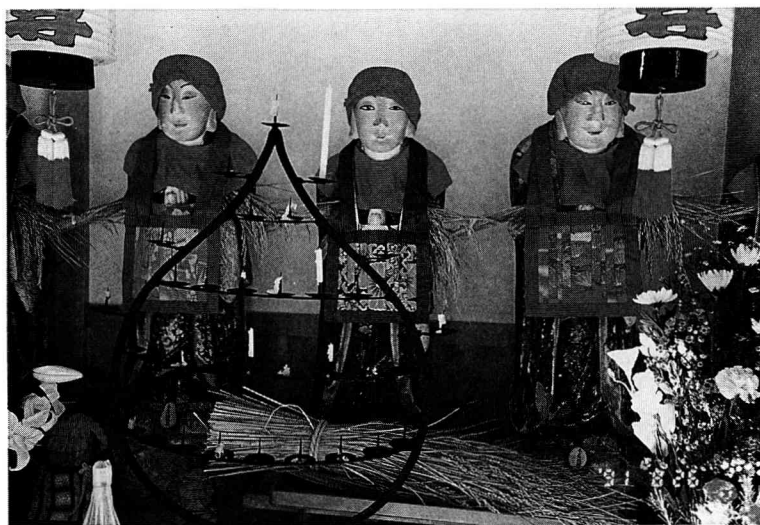
(国立歴史民俗博物館民俗研究部)

《平成3年度民俗研究映像》

# 『金沢七連区民俗誌』

製作 国立歴史民俗博物館民俗研究部

担当 小林 忠雄・菅 豊



## 民俗研究映像

第1部『都市に生きる人々 ― 金沢七連区民俗誌（Ⅰ） ― 』

第2部『技術を語る ― 金沢七連区民俗誌（Ⅱ） ― 』

構成

平成3年度民俗研究映像は、全体を第1部『都市に生きる人々 ― 金沢七連区民俗誌（Ⅰ）』第2部『技術を語る ― 金沢七連区民俗誌（Ⅱ）』と2部構成にする。

第1部では、伝統的な城下町金沢の中心部に物質、情報を供給していた七連区の姿を描く。都市を根底から支える庶民の集住した七連区には、その内部において下町的情緒を残した都市の原風景を垣間見ることができる。しかし、この地域で生産される物質、情報というものは金沢に対する一般的なイメージ（伝統的な華やかな雅の世界）を創出する大きな原動力となっている。古くより七連区の住民は、空間的にも階層的にも中心である川向こうの人々（士族、商人など権力を持つ階級）と密接に結びつくことによって、日々の暮らしを営んできた。ほとんど表舞台に登場しない人々の生活は、決して静的なものではなく、起伏に富んでいる。一見裏方的な彼らに内在するエネルギー、潜在的誇りは、時には表舞台の権力者側に反発としてぶつけられることもある。その方法も彼ら独特の都市的な機知に富んだ発想によって、他の農村部などの民衆蜂起とは別な形で執り行われてきたのであった。彼らは都市の仕掛けの中に組み込まれる一部であったと共に、その仕掛けの演出者としての役割を担っていたのである。都市の本質はそのような中に現出されていると言えよう。第1部では浅野川によって隔てられる二つの世界の連係と拮抗を描くことにより、その都市の本質へと迫っていく。

第2部は、七連区の人々の持つ独特な技術体系を集積することによって、職能者の世界の奥行きを深さ、民衆の知恵を表現する。

### 第1部 『都市に生きる人々 ― 金沢七連区民俗誌（Ⅰ） ― 』

#### 《映画全体の狙いとトーン》

- ・この映画は金沢の七連区という地域の歴史とそ中で培われてきた住民性をテーマに、そこに生きる様々な職種の人々の生き方（民俗）、特に生業として通常はここに活動していて、横の連携はなくとも、事と次第では地域的に連帯するという極めて都市社会的な「したたかな生き方」を描くものである。

- ・金沢も全国の都市と同じように、市の中心部は高層化したビルが立ち並び都市化が進行しているが、浅野川を挟んだ川向こうの七連区だけは、まだ大規模な土地開発の波を受けずに伝統産業や手仕事の技術を内包した職人マチを形成し、昔ながらの瓦屋根の民家が密集していて、ユニークな生活空間を温存している。したがって、この映画ではこの七連区の生活空間やその景観をできるだけ鮮明に表現し、同時に浅野川を挟んだ市の中心部の空間と対比することによってその特徴を抽出するものである。

- ・撮影では、各職人や商人が扱う製品、あるいは生活環境としての色や音に注意しながら行われた。そこでは音は物を作る側の供給の象徴としての人工音が注目され、手作業から発せられた「巧みの音」から製作技術の合理化、あるいは省力化によって生じた機械音への近代的な変化は、そのまま自分たちの生活環境を著しく悪化させたにもかかわらず、そうせざるを得ない時代の流れをこの七連区地域の中から見つけ出すことができる。また、藩政期から城下町の中心部に住む上級武士や家柄町人の大商家の需要によって、職人は荘重で華美な製品を作ることが求められてきた。ここでは彼らが作る製品の色を主に需要の象徴としての人工色が注目される。この様々な色の傾向は現代都市にも継承され、人工色の持つ機能が都市的な重要要素であることを象徴する。色と音はある意味では浅野川の川を挟んだ対立項ともなり、民俗学的なハレとケの概念を意味しているが、ここではそれを暗示したテーマとする。したがってトーンとしては従来から撮られてきたこの種の職人技術映画の技のみを描いた視点とは大きく異なり、職人の環境や意識の構造に焦点を当てたトーンとなるようよう配慮していく。

- ・日本の伝統都市に生きる人々の生き方の「したたかさ」には、ある意味では世間の体裁を構わない下町的要素と、伝統技術の誇りに培われた知恵と感性、そして腕一本でその日の生計を支えなければならない日常的な緊張感に満ちている。それは常に時代の変化に呼応して、決して保守的な物ではなく、フレキシブルであってパワフルである。この映画ではそれを歴史の事象に求め、最終的には幕末期に禁制を犯してまで卯辰山から城の藩主に向かい叫んで窮状を訴えた「卯辰山泣き一揆」にみる反

権力の民衆思想がその地域性に潜んでいることを明示する。

・映画はナレーションによる解説と証言、一部テロップによって構成され、その中で説明に必要な関連の資料絵や景観、仕事ぶりのフィルムをインサートする方式とする。したがって技の巧みさや技術伝承については第2部の『技術を語る』にて再度まとめ収録する。

《シナリオ》

導入

- 6 〰〰〰〰「この映画は1991年度に北陸の都市金沢における旧七連区（浅野地区）の現状と民俗社会を記録したものである。」

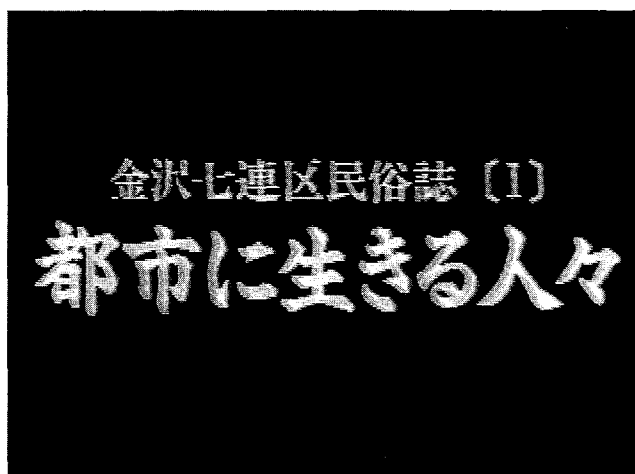
28 都市の色

- 7 〰〰〰〰「都市の職人は、さまざまな仕掛けや装置に必要な色彩の求めに応じて、その技を磨いてきた。」

27 都市の音

- 6 〰〰〰〰「都市の職人マチは省力化のために機械を導入し、多くの人工音を受け入れてきた。」

- 15 タイトル〰〰〰〰「都市に生きる人々 — 金沢七連区民俗誌（I） — 」  
タイトルバック、浅野川の流れ、都市の中央を流れる大河のイメージ、音楽インサート



60 都市生活者の原風景

子供がアイスクリームを買って、おばあちゃんとの会話をする。定点（中の橋の広見）での縄跳び・夕暮れの煙草屋の明かりがとまる瞬間、川の中の鳥を追うところ、河原で遊ぶ子供たちなど

NI (60) 「都市の生活は農村の生活とは違いがあります。狭い路地にある一軒の駄菓子屋さん。学校が終わると小銭を握りしめて、一目散に駆けつけ、籤つきのおやつを買う。おこずかいのもらえない子は指をくわえ、友達が飴をしゃぶるのをうらや

ましげに見ているだけ。

男の子は河原に行って魚取りやとんぼを追いかけて、女の子は日が暮れるまで、道端で縄跳びやゴム跳びにうち興じている。

夕闇迫るそんな路地裏に、見知らぬ烏打ち帽のおっさんが通りかかると、子供たちはいっせいに“人さらいがきたぞー”と叫んで、自分ちにとぼしこむ。そして帰りそびれた幼子が泣きじゃくってとぼとぼと歩いていると、決まって近所のおばさんが優しく連れ帰ってくれた。

子供の時のそんな体験は、都市に生まれ育った人々にとっての原風景なのです。」

~~~~~「ナレーション 梅村澤子」

七連区の概観及び位置関係の説明

金沢の説明、雑観の絵

七連区の説明、地図を使い川向こうをイメージさせる絵（地図、町並みを歩く絵）

- 38 ■N2 (38)「北陸の伝統都市金沢。加賀百万石の城下町として栄えたこのマチは明治初年廃藩置県の後（のち）、当時は五万人いたという武士とその家族の離散によって、極端にさびれた時代がありました。

その頃マチを七つに区切って統治する制度が生まれ、この金沢の市街地を流れる浅野川の川向こう一帯はヒチレンク（七連区）と呼ばれました。

この連区制度は明治三十年ごろまで続けられ、その後廃止されましたが、ヒチレンク（七連区）の名称は、今でもこの地域で使われています。」

インサートカットで金沢の位置を示した地図

~~~~~「広重画「諸国六十八景加賀白やまの図」（石川県立歴史博物館蔵）」

~~~~~「「金沢・江戸道中絵巻」（石川県立歴史博物館蔵）」

~~~~~「金沢城」、「卯辰山」

インサートで七連区の範囲を上記の絵巻にかぶせる

- 45 ■N3 (45)「七連区。この呼び名の響きには、この地域に住む人々のある種の連帯感を感じさせるものがあります。

画面をよく見て下さい。七連区ではごみの捨て方がよそと少し違うんですね。この場所にはごみ捨て場の表示がどこにもないんです。町の人たちには暗黙の内にも約束ごとがあって、決められた日にきちんと梱包されたごみの袋は、時間までに整然と並べられています。そして回収された後（あと）には少しのごみも落ちていなくて、また元どおりのきれいな路地に戻っているのです。だから誰も自分ちの前がごみ捨て場になることを気にしないんですよ。」（ごみステーションの絵）

- 177 ■N4 (45)「浅野川に面した中島町には、明治のころまで神明宮という氏神様がありました。この神様は明治政府によって強制的に、ここよりも大きな浅野神社に合祀させられ、このマチには氏神様がなくなったのです。そこでマチの人たちは一握りのお米を持ち寄って俵に詰め、これを担いで彼らの結束力と心意気を示したのです。

戦後しばらくとどえていたこのソウロリという行事は、マチの青年たちによって復活したこともあります。その時中心となった中島町の方々に、この町の心意気と復活の様子を語ってもらいました。」（ソウロリの絵をかぶせて進める）

ソオロリ

洪水の時に流木を取った話、ソオロリの説明（職人との関わり）、再現したいきさつ  
※民衆の力（心意気）、団結、結束を表現できるように頑張る

~~~~~「（資料映像）昭和55年10月11日に復活したソオロリ行事（石川テレビ制作）」

明治・大正期のソオロリ想像図 (絵 浅野町小学校田浦教諭)」  
川森正恭・村上孝康・森尾嘉昭・工年男・小森嘉・林輝夫の皆さん」

- 75 N 5 (75)「金沢の町は本来お城を中心に、西に犀川、東に浅野川という二本の大川を外堀とみたと、その内側を城下町としました。お城の周囲は藩の重臣たちの屋敷で囲み、そんな武家町を東西に貫く北陸道に沿って商家が立ち並び、商人町が作られました。

しかし、江戸時代の終わり頃には加賀領内の各地から、飢饉で追われた農民や仕事のない次三男が、マチに出てきて、人口は次第に増えたのです。当時の金沢は、すでに十五万人を越える大都市になったといわれています。

特に農村から出てきた人々は城下町の周縁部に住むことが多く、そこは誰もが自由に居住できる場所とされました。すなわち、この浅野川の川向こう一帯は江戸時代まで、足輕などや税金を免除された庶民が交じった、出入りの激しい自由な都市空間だったのです。そしてこの自由な風潮は今日でも変わらずに、この地域に根強く残っているように思われます。」

犀川」「浅野川」

巖如春画「加賀藩年中行事図絵」(金沢大学付属図書館蔵)」

「(米沢修一氏蔵)」

この間、繋ぎ絵をインサート

- 60 N 6 (60)「七連区の特徴といえば、狭い地域に密集した民家の家並み(いえなみ)や、複雑に入り組んだ細い路地。暮らしの似通った人々が住むマチといえます。

そして、昔ながらの金沢の伝統産業に携わる様々な職人さんたちと、その生活を支える魚屋さん、八百屋さん、お米屋さん、醤油屋さんといった日用品を売る店が並んでいます。

しかし、よく見るとそんな民家の間に藩政期以来のたくさんのお寺、そして華やかな都市の遊興文化の象徴ともいえるお茶屋さんの、歴史的なたたずまいを今に残しているのです。

このように、素朴な落ち着きを持つこのマチの風景は、いったい何を意味しているのでしょうか。このマチの昔からの様子と地域の特徴を、数代続いてきたお店の方々に聞いてみましょう。」

七連区の庶民を支えた職業(橋のこっち側の生活を、たんたんと地味なトーンで描く、次の華やかな「劇場としての都市」につなげるために)

- 120 米屋(経田屋)

店の出所、由来についてのコメント、昔の観音町についてのコメント

「米屋 経田佐一郎さん」

- 120 福岡畳屋

創業について(士族が始めた畳屋、地域性をあらわしている)

「畳屋 福岡史郎さん」

- 60 柴原味噌醤油屋

量り売りの方法・実演

「醤油屋 柴原嘉平衛さん」

- 240 岡谷魚屋

一軒一軒売り回ること(フリウリ)、リヤカーにこだわること、箔屋など一般の職人に売る(魚屋が手を加えて売る。職人は忙しいから)



~~~~~「魚屋 岡谷清行さん」

都市の空間の仕掛け、装置、空間構造（「劇場としての都市」を強調、その中で装置としての寺院群を説明し、そこに置ける祭礼などが中央部の人々を吸収し、引きつける役割があったことに注目）

- 100 ■ N7 (100) 「七連区のすぐ背後には標高百四十一メートルの『卯辰山（うたつやま）』があります。江戸時代の初め、金沢城下のあちこちにあった寺院は、藩の寺社奉行によってこの山の麓に寄せ集められました。そして通称「向山（むかいやま）」と呼ばれたこの山には、特別の行事がない限り庶民の登山が禁止されていました。これらのお寺はこの地域と密接に関わり、人々は親しみを込めて加賀万歳の替え歌に託して次のように歌いました。

『門ではたらく全性寺（ぜんしょうじ）、お花で飯（ま）炊く長久寺（ちょうきゅうじ）、豆腐一丁蓮覚寺（れんがくじ）、ここへもちょっこし常福寺（じょうふくじ）、三つの宝を持ちながら、貧乏一番三宝寺（さんぼうじ）』

これらの寺院の縁日には、城下の人々はこぞってお参りに訪れ、夜遅くまで賑ったと伝えられています。

そして、卯辰山とその山麓寺院は、都市の人々を魅了する遊興空間を演出してきたのです。今もこの寺院ではその名残をとどめるいくつかの行事が行われています。」

~~~~~「卯辰山寺院群」

~~~~~「金沢名所 浅野川大橋」（石川県立歴史博物館蔵）」

~~~~~「金沢名所 東廓の賑い」（石川県立歴史博物館蔵）」

~~~~~「巖如春画「加賀藩年中行事図絵」（金沢大学付属図書館蔵）」

寺社の説明のところに宇多須神社の祭りを使う

~~~~~「宇多須神社の秋祭り」

- 180 観音院・四万六千日（経田屋のコメントも入れる）

~~~~~「平成3年8月18日長谷観音院の四万六千日」

~~~~~「森田一二さん」

- 120 西養寺（涅槃団子をまくところと）

~~~~~「（資料映像）平成3年3月15日に行われた天台宗西養寺の涅槃会」

- 10 ■ N8 (10) 「この卯辰山寺院群の中には女性と深くかかわったお寺があります。そこには、この七連区に生きた女の性を示すエピソードがあります。」

- 90 来教寺（お茶屋・芸子さんとの関わり・百度参り・雑多な信仰の表れとして）

~~~~~「天台宗来教寺」

~~~~~「住職 河合智證さん」

- 120 七橋渡し（七ツ橋渡りの意味、しきたり、いわれ。異界と現世を隔てる川、そしてそれを連絡する橋が、精神世界に反映されたものとして捉える。川の向こうと川の内側の観念的な交流を表現する。これが物質、情報の交流を描く際の伏線となる）

- 80 ■ N9 (80) 「市内を流れるもう一つの川、犀川と比べ流れの緩やかな浅野川は、金沢では別に女川と呼ばれ、七連区の人々の生活と深くかかわってきました。この川は人々の精神的な境界ともなりました。

したがって、川の兩岸に住む人たちはそれぞれに川向こうという異界意識を持ったのです。



すなわち城下の内側の人たちにとって、卯辰山を含めた川向こうは日常生活の苦難から逃れることのできる別世界だったのです。一方、七連区の人たちから見れば、お城を含めた川向こうは、経済力を誇示した為政者の世界でした。その両者を繋ぐのが橋だったのです。

近年、女性たちの間では浅野川にかかる橋を渡り、老いの病にならぬよう祈願する『七つ橋渡り』が行われています。秋のお彼岸の中日、暗やみの中を黙々と歩く女性の一団は、幻想とも思われるような光景を私たちにを見せてくれたのです。小橋のたもとにある床屋さんの奥さんはこう言っています。」

(庄田民子のコメントに七橋渡りの絵をかぶせる)

~~~~~F28~~~~ 「庄田民子さん」

~~~~~F29~~~~ 「平成3年9月23日の七つ橋渡り」

~~~~~F30~~~~ 「彼岸中日、団子七つ、一言いうたら仏にしょ」

80 N10 (80) 「七連区のもう一つの遊興空間は、東のお茶屋街なのです。かつてこの歓楽街は、武士や町家の旦那衆が遊び場でした。明治に入るとここは、市内の中心部で大きな商いをする相場師たちの商談の席に使われました。その当時、お茶屋に働く芸子さんたちは、ファッションの先端に行く着物文化を担い、同時にお座敷芸の粋を集めた芸能の技に磨きをかけてきたのです。

お茶屋芸の背景には江戸時代、愛宕町の芝居小屋や、明治四年に興行が始まった『桜馬場の芝居』にみる、劇場文化の影響があると考えられます。こうしてお茶屋を中心とした遊芸の世界が、その周囲の町全体に都市的な遊びと芸能に対する価値観を自然の内に高めていったのです。したがって七連区は都市の中心部から見て、劇場都市のイメージで見られてきました。

この町が育んできた芸能への関心は、様々な形の催し物として現在もなおあらわれています。」

(後半部に杵望会の冒頭の絵をかぶせる)

~~~~~F31~~~~ 「(十月社刊『浅野川年代記』より)」

~~~~~F32~~~~ 「明治3年、東山芝居の番付(石川県立歴史博物館蔵)」

~~~~~F33~~~~ 「明治6年、浅野川馬場芝居の番付(石川県立歴史博物館蔵)」

~~~~~F34~~~~ 「明治19年、桜馬場戎座の番付(石川県立歴史博物館蔵)」

~~~~~F35~~~~ 「明治26年、「東廓芸妓演劇」ちらし」(石川県立歴史博物館蔵)」

※36※ 「明治36年頃の芝居小屋」

※37※ 「平成3年11月10日、金沢市民ホールで開催された邦楽演奏会、杵望会の模様」



ヨソの人々を受け入れいるための職業 — 仕掛けの演出者・裏方さん — （多くの人々、職業が華やかな世界を支えており、「劇場としての都市」を構成している状況を描く）

- 60 ■N11 (60) 「お茶屋さんとはそもそもどういう世界なのでしょうか。浅野川のほとりに生まれ育った明治の文豪、泉鏡花は大正八年に書いた『由縁の女（ゆかりのおんな）』の中で、このお茶屋街の印象を次のように述べています。

『東の廓と称する新地は、この山裾を入江のごとく続いた麓にトウヤ祭りなる毘沙門の社に接している。どこか、そのあたりの二、三階、高楼（たかどの）の笑い声の、風に乗って来たに相違ない、と思うにも、袖褙（そでつま）をひらひらと、怪鳥に乗った怪しい女が峰を飛んだようすごかった』

そのあたりの様子を、東のお茶屋街の中心で活躍する女将さんに聞いてみましょう。」

- 120 中村屋の女将さん

東の説明、置き屋の盛衰について（数など）、女将になったいきさつ、芸を維持するために現状におけるおねいさんたちの重要性（ここに玄関から2階までの動きの絵や、ドリー、掃除風景、花を生ける場面、検番の中での会話など『劇場の舞台』としての置き屋風景を印象づける）

※38※ 「中村屋の女将 中村千恵さん」

- 15 ■N12 (15) 「中村屋の芸子であるふみねえさんは、小さいころからひたすら芸を身につけてきた中堅の芸子さんです。芸を中心にした彼女の生活をちょっと見てみましょう。」

- 300 芸子さん（華やかな『舞台』に上がる主役『劇場の女優』としての役割を表現、芸事の習う過程、自分がどうやって習ってきたか、六才六月紅白の足袋で練習するという語りなどをかぶせる）



踊りの師匠（若柳：『舞台』を支える裏方『振付師』としての役割を表現）、師匠にあいさつ、実際の踊り、風呂、髪結い（『舞台』を支える裏方『メイク係』としての役割を表現）、着替え、出ていくシーン（ここに、芸事の盛んな理由（裏日本、環境）、芸の種類（踊りの季節性・機会・扇子・着物などその小道具）の話をかぶせる）

〜F39〜「中村屋の芸子 田中伊佐子（ふみ）さん」

〜F40〜「踊り師匠 若柳賀津雄さん」

- 18 N13 (18)「この華やかなお茶屋の舞台を支える裏方では、いろんな職人さんたちがその仕掛けを作り出してきました。それはそのままこの辺りの技術の集積を示し、七連区に住む人々の機知に富んだ歴史を物語っています。」

- 148 福嶋三弦屋（『舞台』を支える裏方『楽器屋』としての役割を表現）  
三味線を使う芸事の説明、父・祖父との作り方の違い（個人的な違い）、長唄の師匠（村上氏）もかぶせる

〜F41〜「三味線屋 福嶋十一さん」

〜F42〜「長唄師匠 村上栄爾さん」

- 60 友禅（『舞台』を支える裏方『衣装係・デザイナー・ファッションコーディネーター』としての役割を表現。色を中心に描き、華やかさを強調する）  
能川氏：芸子さんの衣装を作るいきさつ（家が近いから）

〜F43〜「加賀友禅作家 能川光陽さん」

- 109 しみ抜き屋（『舞台』を支える裏方『衣装係・デザイナー・ファッションコーディネーター』を更に裏方として支える役割を表現）  
裏方商売であることを強調、自分で作りたくなる気持ちについて、色を大切にするために北向きの窓にする話

〜F44〜「染色補整 二木秀樹さん」

- 60 N14 (60)「こうして見ていくと、彼ら職人が作り出す仕掛けの文化に潜む要素として見逃せないのは、都市の人々が求める色彩の刺激なのです。その刺激を満たすために、人は無味乾燥なマチの生活を人為的な色でもって演出してきました。」

江戸時代の金沢。色はマチに溢れ、特に武士や商家のハレの日には多くの人々の目を奪ったのです。例えば結婚式や今で言う七五三のハカマギの儀礼、祭りや七夕などの年中行事は、色の豊富な今日とは比べられないほど、それは衝撃的なものであったにちがいありません。

卯辰山寺院群の一つ、真成寺は昔から鬼子母神さんと呼ばれ親しまれ、ここには子供の健やかな成長を祈るため、江戸時代から色とりどりの着物が奉納されてきました。」

≡≡≡E45≡≡「巖如春画「加賀藩年中行事図絵」（金沢大学付属図書館蔵）」

120 真成寺（都市の色の説明ナレーションを入れる）

子供の着物のいわれ、虫干しの話

※土用干しなどの絵もかぶせる

≡≡≡E46≡≡「日蓮宗真成寺」

≡≡≡E47≡≡「住職 深村智山さん」

- 55 ■N15 (55)「金沢では、普通の家でも豪華な結婚式が行われています。この秋、ちょうど七連区に住んでいる村山・石田両家の結婚式が行われました。そこでは人生のハレの日を華やかにするために、様々な色が使われています。着物をはじめとして嫁暖簾（よめのれん）や水引などに豪華さが強調されています。そして結婚式の当日、嫁ぎ先には親戚によって五色生菓子の箱が届けられていました。

五色生菓子とは、日月山海里（にちげつさんかいり）といって、五つの自然を象徴しています。それは太陽、月、山の岩肌、海の波頭（なみがしら）、里の田んぼを表しています。

浅野川の川っぶちのお菓子屋さんでは、結婚式に欠かせないその五色生菓子を作っています。」



90 米島生菓子屋

工程を詳しく、できるだけインタビューをかぶせる

≡≡≡E48≡≡「和菓子屋 米島武次さん」

- 30 ■N16 (30)「見て下さい、ほらお茶屋さんのこんな格子にまで色が塗ってあるんですよ。赤い色は本来、日本の文化の中ではハレ感覚を代表する色だったのですが、それは都市には日常的な色として溢れ、そこではハレとケの世界が見分けられなくなったのです。

その他にも金沢の料亭やお茶屋さんの仕掛けには、様々な工夫が求められて来ました。」

(料亭の雪つりなどの絵を後半にかぶせる)

- 99 建具屋 (ベニガラ格子により色に結びつける、『舞台』を支える裏方『大道具係』としての役割を表現)

お茶屋との関わり (雪見障子、吉原襖など、一般との違い、細いものを好む)

≡≡≡~~149~~≡≡≡「建具職 岡本忠さん」

- 74 宮岡竹細工屋 (竹の緑色を強調し色と結びつける (都市に季節感を持ち込むものとして) 『舞台』を支える裏方『小道具係』としての役割を表現)

今は料理の器を作っている (料理屋に卸す、昔との違い) という話

≡≡≡~~150~~≡≡≡「竹細工職 宮岡義守さん」

- 40 ~~N17~~ (40) 「都市の遊興文化の中で、人々を最も魅了する色調は金色です。例えばお茶屋の芸子さんは金屏風を背に踊り、お客は金を使った蒔絵の膳椀で料理を楽しみます。こうした華やかな色合いを持つ金は、七連区金箔職人さんたちによって作られてきました。金が世相を反映して変動的であるように、彼らの生活は浮き沈みが激しかったのです。」

≡≡≡~~151~~≡≡≡「安江金箔工芸館蔵」

- 130 安江金箔

商売をひろげ過ぎて、工場をつぶした話

≡≡≡~~152~~≡≡≡「安江都伊子さん (元安江金箔工芸館長)」

ヨソの人々と対抗するイメージ — 権力・高階層との対抗 —

寿経寺 (七稲地藏の法要)

稲穂に注意して編集、南無阿弥陀仏ここには一揆の説明をナレーションで入れる

- 100 ~~N18~~ (100) 「浅野川の大橋を渡ると、すぐ右手に観音町の小路 (こみち) があって、そのつき当たりの坂下には、浄土宗のお寺寿経寺があります。そこには稲穂を抱いた七体のお地藏様が並んでいます。」



江戸時代の終わり、安政五年七月十一日の夜、当時山に上がることが禁止されていた卯辰山には、城下の北部の人たち二千人数が集まりました。その頃、米の買い占めによって生じた人々の飢えは、もはや我慢の限界を越え、同時に藩の無策に怒った民衆は、お城に向かってその苦しさを訴え

『ひだるいわいやー、わしらにこめくれまいやー』

と泣き叫んだのです。この事件は後に『卯辰山泣き一揆』といわれました。その時逮捕された七連区にある大衆免町（だいじめまち）の『北市屋市右エ門（きたいちや いちえもん）』ら七人の首謀者は打ち首、もしくは牢死の極刑に処せられたのでした。その後、この七人の冥福を祈って地蔵が立てられ、それは死を覚悟してまで望んだ稲穂を抱えていることから『七稲地蔵（なないねじぞう）』と呼ばれました。平成三年八月、今年も寿経寺の地蔵盆に合わせ、泣き一揆で亡くなった犠牲者たちの供養が行われています。」

≈≈≈53≈「浄土宗寿経寺」

≈≈≈54≈「七稲地蔵」

≈≈≈55≈「平成3年8月26日の地蔵盆」

- 60 N19 (60)「私たちには、この百三十年前に起こった事件の顛末が、もはやこの辺りでは風化しつつあるように見えます。このことはこの地域に住む人々にとって、今やどうでもいい話になったのでしょうか。」

現在、私たちの目の前にある、狭い地域に密集した民家の家並みや、複雑に入り組んだ細い路地は、現代社会という荒波の中でも一見古さをとどめ、変わらないように見えます。しかし、現実にはそこには今日の社会に適応した、たくましい生き方を垣間見ることができるのです。」

景観保存

- 65 N20 (65)「昭和六十二年八月、浅野川沿いの地元三町会は、地域内の建物について高さを制限した地区計画を金沢市に申し入れました。同時に進行しつつあるマンション建設計画に対しても、これらの町会は『浅野川の景観を守る会』を結成し、住民集会を開いています。その結果、平成二年にはマンション一棟を建設中止にまで追い込んだのです。」

また、その景観保存の住民運動に呼応するように、浅野川周辺の老舗の人達によって『老舗文学ロマンの町を考える会』が発足しました。この会はこの地域で店舗改築や住居の建て替えの際に、歴史的景観にふさわしいデザインを施した施主に対し、毎年『境界景観賞』を与える活動を行っています。」

≈≈≈56≈「（資料 「北国新聞」より）」

- 40 N21 (40)「いまこの金沢市の中心部は都市化が進み、ビルの高層化・巨大化によって景観が大きく変わろうとしています。この都市化の波は浅野川の川向こうの地域にも、どんどん押し寄せているのです。その一つの例は、現代の車社会に順応せざるを得ない、狭い路地に住む七連区の家々でとられている駐車方法なのです。卯辰山の上から長年このマチを見続けてきた国本さんは、このことを次のように鋭く指摘します。」

- 180 国本さんの証言（住居をえぐった駐車方法の絵をかぶせる）

≈≈≈57≈「国本昭二さん」

30 ■■■N22■■■ (30)「このように見ていくと、一方では町並み保存を住民運動にまで盛り上げようとする動きと、もう一方では景観とは無関係に家の一部をぶち抜いてまで車庫にしようという人々のたくましさは、一見矛盾しているように見えます。しかし、私たちにはこの二つの現象は同じ生き方の表れのように思われるのです。」

40 ■■■N23■■■ (40)「町並み保存といってもそれはノスタルジックな感覚や、古いものに価値をおく文化財意識によって起こってきたものではありません。現在もなお、この景観は、中央の人々を誘い込む遊興空間としてはたらいっているのです。まさにこのことは蓄積された伝統技術とともに、自分たちの生活空間までも商品化し、付加価値を高めていこうとする考え方なのであって、そこには現代の七連区に生きる人々のたくましさを読み取ることができるのです。」

50 ■■■N24■■■ (50)「都市に生きる人々は、自分にふりかかった火の粉を払う時にはある種の団結を示すこともあります。しかし本来は個々に自立せざるを得ない社会的条件が課せられているのです。それは農村の人々が、ムラという共同体社会に抱かれ、常に安心感を得ている世界と大きく異なっています。

この基本的な違いは生き方の違いであり、そしてこのような生活条件で培われた都市の民俗社会こそ、したたかなバイタリティーを内包しているように思われるのです。」

≈≈≈F58≈≈「金沢七連区民俗誌 (I)・・・終わり」

≈≈≈F59≈≈

「製作 国立歴史民俗博物館  
民俗研究部  
小林忠雄 菅 豊

製作協力 大阪東通  
松田 弘 (照明) 谷内昭慶 (調整)  
岡本和夫 (撮影) 藤野欽也 (音声)」

製 作 国立歴史民俗博物館

民俗研究部

小林忠雄 菅 豊

製作協力 大阪東通

米田俊洋 (調整) 岡本和夫 (撮影)

松田 弘 (照明) 藤野欽也 (録音)

谷内昭慶 (効果) 尾崎裕之 (効果)



『技術を語る ― 金沢七連区民俗誌（Ⅱ） ― 』  
《シナリオ》

導入 技術者の顔をアップでおさえる（8人×2画面のマルチ画面に集合させる）。

タイトル~~~~「技術を語る ― 金沢七連区民俗誌（Ⅱ） ― 」

※黒い画面に白ぬきで



- 30 ■ N 1 (30) 「北陸の伝統都市金沢。この城下町には西に犀川、東に浅野川という二本の川が町中を流れています。浅野川の東側には、伝統的な技術を駆使する職人さんたちが大勢住んでいます。このあたりは、明治の初年から七連区と呼ばれてきました。

。私たちは彼らの技術に着目し、民俗学の立場から、都市を支える生活技術伝承の実態を記録するために、この町の人々に問いかけました。」

~~~~番外~~~~「ナレーション 梅村滯子」

- 15 ■ N 2 (15) 「金沢城下町ができて五百年を経た今、藩政時代から営業を続ける老舗や、小商いを継承する人々には、この町独特の商い方法が残っています。そのあたりのことを探ってみましょう。」

~~~~E 2~~~~「伝統的商い方法の伝承」

漢方薬屋（綿谷小作薬局）

~~~~E 3~~~~「漢方薬局 綿谷小作さん」

~~~~E 4~~~~「カンゾウ（金沢大学薬草園）」

「オウレン（金沢大学薬草園）」

「ブクリョウ（金沢大学薬草園）」

米屋の技術

~~~~E 5~~~~「米屋 経田佐一郎さん」

魚屋の技術

~~~~E 6~~~~「魚屋 岡谷清行さん」



- 60 ■ N 3 (60)「金沢には加賀藩の上級武士や豪商たちが、表の顔を作るための、たしなみの文化が発達しました。彼らの生活は、優雅さと風流によって様々な装置を要求し、そのことがまさに伝統都市的なものだったのです。

寛文六年、裏千家の初代、千宗室（せんこのそうしつ）は、茶道文化をこの町に広めました。

茶道にはいくつもの作法があります。まずお抹茶を立てる時には、何と言っても緑のお茶が主役です。細かに挽かれた粉のお茶は、加賀蒔絵の絢爛豪華（けんらんごうか）なナツメに入れられ、いっそう茶席を引き立たせます。亭主がお茶を立てる道具の向こうには、荘重さを演出する金の小屏風（こびょうぶ）。茶人の心を引き寄せる季節の象徴として、花は生命溢れる青竹の花入れに生けられ、茶室にある種の緊張感を醸し出します。」

~~~~~「（資料映像） 曹洞宗月心寺の茶会」

~~~~~「茶道師匠 小林宗伸さん」



米沢茶店

~~~~~「茶商 米沢修一さん」

- 45 **N4** (45)「明治以降、このたしなみの文化の担い手が変わっても、その装置を作る伝統産業は、付加価値を持って現在もお生き続いています。この伝統産業を支える職人さんたちには、二つの技術的あり方の違いを見ることができます。

まず一つに、伝統産業の中でも、その工程の途中段階の職種があります。この分業化した職業は、注文主の求めに応じて最初から決められたものを作らなければならない、もとより裏方に徹したもののなのです。しかし、ここでは高度な熟練技術が要求されます。

それでは、こうしたどちらかといえば、保守的とも思われる技術伝承を聞いてみましょう。」

(「風俗図絵」、料亭などの絵をかぶせる)

~~~~~**F18**~~~~「巖如春画「加賀藩年中行事図絵」(金沢大学付属図書館蔵)」

~~~~~**F11**~~~~「保守的な伝統技術の伝承」

畳屋の技術

~~~~~**F12**~~~~「畳屋 福岡史郎さん」

紋屋の技術

~~~~~**F13**~~~~「紋屋 真野利行さん」「真野三夫さん」

しみぬきの技術

~~~~~**F14**~~~~「染色補整 二木秀樹さん」

ウワズミの技術

~~~~~**F15**~~~~「うわずみ 中田敬一さん」

箔打ちの技術

~~~~~**F16**~~~~「箔屋 安江都伊子さん」

箱屋の技術

~~~~~**F17**~~~~「箱屋 大西裕さん」

~~~~~**F18**~~~~「大西さんはこの日、桐箱をお得意さんの大村古物店に届けた」

都市人のアイディアを示すエピソード

- 40 **N5** (40)「都市の人々は、個々に自立して生きてゆかねばなりません。今日の糧を得るために、人々は己の才覚と技でもって、日々の暮らしを生きぬいているのです。したがって、彼らは、様々な機知に富んだアイディアを発揮してきました。この七連区には大正年間に、当時としては思いもつかぬような商品を編み出した人物がいました。

大正五年、藤本吉二は病床の折に、おかゆの吹きこぼれてできた透明の膜からヒントを得て、粉菓を包むオブラートを発明しました。彼は、他にも子供の遊び道具のオハジキやビスケットなども工夫したといわれています。」

藤本玩具店

~~~~~**F19**~~~~「藤本吉二の子息、藤本四郎さん」

- 25 **N6** (25)「このようなアイディアを駆使しなければならない職業が、伝統産業のもう一つの技術のあり方の中に見いだせます。これらを担う職人さんは、彼らの技の成果を売り込むために、熟練した技術に加えて、更に個性的な創意工夫が要求されま

す。それは現代において、「芸術家」を生み出す土壌ともなりました。」

≡≡≡20≡≡ 「創造的な伝統技術の伝承」

竹細工屋

≡≡≡21≡≡ 「竹細工職 宮岡義守さん」

建具屋の技術

≡≡≡22≡≡ 「建具職 岡本忠さん」

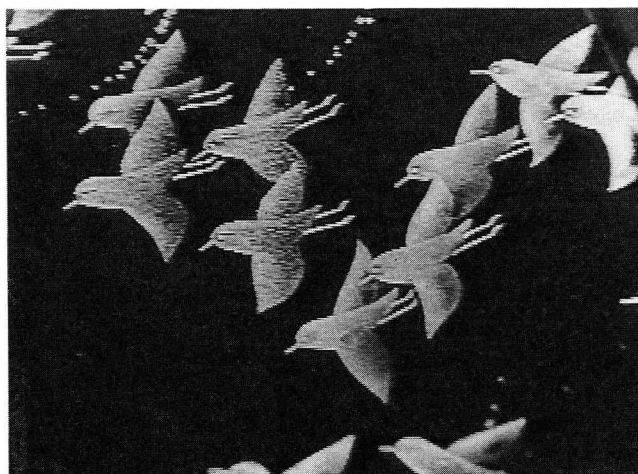
三味線屋の技術

≡≡≡23≡≡ 「三味線屋 福嶋十一さん」

友禅の技術

≡≡≡24≡≡ 「加賀友禅作家 百貫俊夫さん」

≡≡≡25≡≡ 「加賀友禅は、野生の花や鳥などを題材に選び、葉の虫食いまでも写実的に描いている。」



蒔絵の技術

≡≡≡F26≡≡「蒔絵作家 野村大仙さん」

まとめ

- 55 ■N7 (55)「これまで民俗学では、技術伝承の研究といえば、歴史的な技そのものと、でき上がった製品の用途の記録に終始してきました。しかし、現実には社会の変化に応じて、モノを作る職人さんたちの生活環境や、意識構造も変わってきたと思われます。私たちは、変化の激しい都市社会の中で、その技を育んでいる場の方に注目し、生活としての技術伝承の記録を目的としました。

そうして、「伝統」という金沢ブランドで集約されたペールをはがしてみると、これまで撮影してきた映像は、この都市に住む人たちの日常的な風景に過ぎません。

今後、民俗学の課題としては、このような実態を示すだけでは不十分であり、更にカメラは彼らの心の奥底まで、入り込まなければならないと思われるのです。」

≡≡≡F27≡≡「金沢七連区民俗誌（Ⅱ）・・・終わり」

≡≡≡F28≡≡・・・一部のエンディングのスーパーと同じ



On Urban Folklore Documentation and Methodology  
—From the Production Process of the Folk Research Film,  
'Shichirenku zone Folk Records of Kanazawa city'—

KOBAYASHI Tadao

The present paper is a study on the manner of urban folklore documentation and methodology, from an observation of the production process of the folk research film, 'Shichirenku zone Folk Records of Kanazawa city', which was undertaken by the Folklore Research Department of this Museum in 1991.

First of all, I give my own views on what urban folklore documentation and methodology is, which form a premise on how the city has been looked at until now, the angle of view of the research; here city is defined as a town obliged to undergo the changes of modernization, a town that has built a living and technical culture in the pursuit of greater rationality, with a strong sense of fashion brought about by the introduction of Western culture; as YANAGITA Kunio understood it, 'The city is the window through which culture is imported.'

Thus I list the major themes in the recording of urban folklore, and give my personal opinions on how surveys should actually be carried out, what items should be surveyed and point to note in the field.

In other words, I point out the areas that differ from the way one would consider the folk society of a farming village; mainly, in the city sensibility has a strong influence, and there is a demand for ever more up to date information leading to profit.

This paper follows the process of the visual documentation of the present state in the city of Kanazawa, and indicates the problems arising from the use of film, one of the more effective forms of expression, in view of the form that folklore documentation and methodology should take, as seen above.

I then present the completed scenario as the final result, study its effectiveness as visual folklore and as urban folk documentation and methodology, and make several observations while also pointing out problems.

All in all, both written documentation and visual documentation are methods of expression that present problems, and I emphasize that all one can do is to make the most of the strong points of each method in depicting a record of urban folklore.